

かかっているであろう。

（国際日本文化研究センター客員准教授／

二〇一九年度共同研究員）

## Unique or Universal? 日本とその世界文明への貢献 —ワルシャワ大学日本研究創設百周年事業、招聘報告

稲 賀 繁 美

一、  
ポーランドは本年、日本との国交樹立一五〇周年を迎え、関連行事が目白押しだった。筆者も本報告に先立つ五月には、現代美術の日本とポーランドとの交流の一環として「直筆」と題された会合への参加を要請され（七月一〇—一二日、ワルシャワ・ポーランド建築アカデミー）、両国の藝術家たちに交じって、一服の講演を行った。それから三カ月後の一〇月二三日—二五日の日程で、今度はワルシャワ大学で表記の国際研究会が開催された。主催責任者の Agnieszka Kozłta 教授からの要請を受けた筆者は、全体講演の一環を

担う役回りとなった。あくまで個人参加であり、もとより国際日本文化研究センターを代表する立場ではなかったが、今回の催しは、日文研の国際研究協力事業とも無縁ではない。本来ならば、日文研を代表できる立場の方が参加してしかるべき行事だったことを、冒頭にひと言お断りする。

初日の開会式は、大学本部構内の由緒ある古図書館を会場とする。まず、ポーランドと日本との学術交流に関する著作で国際交流基金賞を受賞した Ewa Palasz-Rutkowska 教授が、自著に基づき、多くの秘蔵写真を映写しつつ、ポーランドにおける日本学の沿革から今日に至る発展を回顧した。Bogdan Richter (1891-1980) によって日本語講座が開設されたのが一九一九年。その後、第二次世界大戦を経た一九五二年、Wiesław Kosiński (1915-2005) が中国学科内で日本研究を開始する。七五年には日本研究と中国研究を束ねる形で極東学科が設立され、一九九〇年にはワルシャワ大学東洋学研究所日本韓国学科へと改組される。二〇一五年には同大学東洋学部日本語科となり、学科長に就任したのが、日文研にも客員研究員としての滞在経験のあるコジラ教授である。

関係する学者のなかでもコタンスキは一九三〇年に日本研究を開始し、五二年からは日本学専攻の修士課程指導の権限

を獲得し、現在に至る多くの人材を養成した。『古事記』ポーランド語訳をはじめ、『万葉集』と題する日本古典文学選は、入門書としても貴重な貢献をなしてきた。日文研は創設準備の段階で梅原猛準備室長がポーランドを訪れた際、コタンスキ教授とも意見を闘わせている。日本の国学の伝統を受けて独自の見解を持つに至ったコタンスキは、梅原氏とは古事記の神名解釈では折り合わなかったが、両者の知的な信頼関係については、会議でも特段の言及がなされ、東京大学や北海道大学などから派遣された先生方と並び、国際日本文化研究センターとの強い絆も強調された。中西進教授、鈴木貞美教授などの末席に、聊かならず場違いにも不肖当方の名まで言及されたのには驚いた次第である。

古代日本史や考古学を担当した Jolanta Tubielewicz (1932-2003)、中江兆民研究で博士号を取得し『方丈記』研究でも知られる Krystyna Okazaki (1942-2008) のおふたりはすでに物故されたが、当日は、安部公房や大江健三郎とも交友があり、日文研にも滞在された Mikolaj Melanowicz 先生がお元氣な姿を見せ、完璧な日本語で回顧談を披露された。メラノヴィッチさんはクラクフのヤギェウォ大学に日本学科を立ち上げた立役者でもある。かつて講演のため列車でクラクフま

でご一緒した経験もあるが、さてあれは何時のことだったか。日本から派遣された歴代の講師には米川和夫、工藤幸雄など翻訳家としても著名な名前が連なる。また厳戒令下で勤務した吉上昭三を慕う声も多く聞かれた。だがとりわけ当日は一九七〇年より長年当地で教鞭を採っている岡崎恒夫先生の功績を称える席となった。折から『ワルシヤワ便り』が未知谷から刊行された。NHKラジオ深夜便「ワールドネットワーク」で知る人ぞ知る長寿番組、ポーランドからの報告のうち、二〇〇八年からの一〇年分全一〇九回をまとめた出版であり、巻末には、今回も招待された沼野充義先生との対談もある。岡崎先生は旧奉天のご出身で、大陸育ちに関する会話を交わせたのは、予期せぬ収穫だった。

## 二、

最初の講演はその沼野充義さんによる「佳人たちの奇遇」あるいは *Strange Encounters of the Two "Beautiful Ladies"*。ポーランドと日本それぞれの文学を「佳人」に譬えての英語での談話だった。相互の翻譯史に精通した論者ならではの総合的な鳥瞰。洋の東西を舞台に波乱万丈の冒険恋愛政治絵巻を描く東海散土の原作では、「波蘭ハ威名欧州ヲ振動シ牛耳

ヲ取テ四隣諸邦ヲ朝ゼシメシモ、物換リ星移リ国政萎微遂ニ亡滅ニ至レリ」とある。同様の亡国の憂いは軍歌「波蘭懷古」にも残る。「淋しき里にいでたれば／此処は何処と尋ねしに／聞くも哀れやその昔／亡ぼされたるポーランド」。講演は二葉亭四迷（一八六四—一九〇九）とBronisław Piłsudski（1866-1918）の交流へも展開する。アレクサンドル三世暗殺計画に連座し樺太に流刑となったピウスツキは、アイヌ、ギリヤーク、オロックなどの民俗資料、写真・音声資料を多量に残した人物である。筆者はこの話題を奇貨として、『佳人の奇遇』は梁啓超が漢訳したものがヴェトナムでチュノムに訳され、越南の国民文学に収まったという裏話を紹介させて頂いた。亡国の悲哀と独立回復への悲願が、あるいはポーランドとヴェトナム両国に共通した運命でもあった。

午後には三篇の特別講演が続く。まずは関口時正・東京外国語大学名誉教授による英語講演。On Some Advantages of the Cumbersome Japanese Language in Appreciating and Nourishing World Literature. 日本語は漢字にひらがな・カタカナと三種類の文字表記があり、また漢字も音訓の使い分けが面倒で、規則などないに等しく、用法を個別に丸暗記するしか対応策もないに等しい。取挙げられた例が傑作だった。

「生ビール、生きる、生まれる、生活、一生」が読めるのはさしずめ修士レヴェルの条件。「生い立ち、生える、芝生、生真面目」となるとプロ級だろうが、さて「生業、生憎、今生の暇乞い」となると、日本人でも若い世代にはお手上げだろう。だがこの厄介を逆手にとると、外国文学の日本語への翻訳は意外な効能を発揮する。その具体例として関口先生は、二〇一八年度第六九回読売文学賞を受賞して話題となったボレスワフ・プルス作『人形』を例に取る。原題は『Lalka（ラルカ）』だが、世代を異にするイディッシュ語使いの登場人物たちの破格のポーランド語を微細に訳し分けるには、英語などよりも日本語のほうがはるかに柔軟性に富む。絶妙の翻訳ぶりには、会場から喝采や笑い声があがった。格調たかい英語も逸品の語学の達人は、最近の趣味とおっしゃるハンダール訳との比較にまで話題を広げ、聴衆ともども賛否両論に花が咲いた。

雑談では、当地にも招待された平野啓一郎の『葬送』（二〇〇二年）が話題となった。関口さんたちは『シヨパン全書簡1816〜1831年 ポーランド時代』（岩波書店、二〇一二年）に続く下巻も翻訳中だが、これは平野の小説執筆時期には、残念ながら間に合わなかったらしい。シヨパン

はジョルジュ・サンドへのフランス語書簡にEではなく  
vousを使っているが、その男女関係の含意は？またその語  
感をどう日本語に移したのか苦労した、といった舞台裏を  
伺えたのも貴重だった。

三人目の特別講演は、渡邊秀夫、信州大学名誉教授。国文学畑だが、信州大学とワルシャワ大学との交換協定の初期から尽力された方である。「かぐや姫と浦島―漢文文化と日本文化」と銘打ち、ポーランド語も完備した映像資料併設の日本語講演である。ご講演のあと私的に、かぐや姫の「きと影になりぬ」は見えなくなったのか、それとも影とは光の意味か（田中貴子説）についてご見解を伺ったが、語彙論的にこは「不可視」でよからうとのこと。また「かぐや姫」はウラジミール・プロップの類型学分類にいう「求婚譚」とは結末が合致しないというツベタナ・クリステヴァの見解をめぐっての議論などにも、花が咲いた。「浦島」は明治期になると例えば山本芳翠がフランス・アカデミー仕込みの油彩画にも仕立てている。その背景には同時代の日本における神話研究の展開があった。ご講演は『かぐや姫と浦島 物語文学の誕生と神仙ワールド』（塙書房、二〇一八年）からのサワリのご紹介だった。

そのつぎの英語講演は筆者自身のものゆえ、割愛に及ぶ。会議の主題に「普遍と特殊」とおっしゃるが、そもそも普通の公準は誰がいかなる権限で設定したのか。そこで特殊として市民権を得るためにはいかなる策略が必要か。こうした比較には安定した基準枠の座標設定が必要だが、普遍と特殊との間ぎあいにあつては、そうした座標軸そのものが揺らぐ。その具体例の検討である。キリスト教のケノーシス概念と仏教の無との比較可能性については、西田哲学を専門とするコジラ先生が猛然と嘯みついてくださり、「これで挑発行為だけは目論見どおり達成できた」と応答すると、会場は爆笑に包まれた。それにつづき、図書館ホールで簡単な講演を含めた展覧会が催され、最後には学生たち総出演で日本の唱歌や流行歌のメドレー合唱がなされた。それぞれの世代が留学中の日本で覚えた歌謡に忘れ難い記憶を刻んでいた。

### 三、

翌日からは、ヴィスワ川河畔の新図書館に会場を移す。会場に着くと、学生からこの図書館は初めてですか、と尋ねられた。実は一〇年以上前、開館直後に訪れたおり、間違えて非常扉を開けてしまい、図書館中に警報を鳴らしたのに、自

分が下手人とは気づかなかった、といった失敗体験を、はしなくも思い出した。本日は英語発表だが分科会形式のため、主として「美学」関係に出席した。楽焼についての専門的な発表 (Eva Kaminski)、「をかし」概念への考察 (Sonoyama Senti)、「間」の概念をめぐる考察 (Yamanashi Makiko) につき、「演劇」については、「新作能」 (Jadwiga Rodowicz-Czechowska)、「女性の能役者として著名な鏡仙会」 (Uzawa Hikaru) によるご講演、「歪んだ鏡」としての歌舞伎論 (Iga Rutkowska)、「文楽に「ほとんど独自」な人形劇を見る見解 (Beata Kubiak Ho-Chi)」鈴木忠志 (Grzegorz Ziolkowski)」。さらに午後には「美術史」で横浜版画論 (Aleksandra Görlich)、「現代日本デザイン論 (Jakub Karpoluk)」三島由紀夫と犬島に復元されたその旧邸 (Waldemar Affelt)、「一九二〇年代に伊豆大島を描いたブリュルークらウクライナの画家たち (Svitlana Rybalko)」宮本武蔵作と伝えられる木彫りがハンガリーで発見された顛末 (Ovidiu Morar)。夕刻からは「哲学と宗教」で内村鑑三論 (Agnieszka Kozyra)、「および森有正における「もののあわれ」論 (Wakui Yoko)」。ほぼ全員の発表に (英語で) コメントを加える機会を得たが、紙幅の都合のため、ここに再録する余裕はない。



図1 第三日、国立美術館での見学会

作品は Henryk Hektor Siemiradzki (1843–1902) のローマを舞台とした歴史画



図2 閉会式に先立つ「平和への祈り」旧図書館・中央講堂にて

最終日には、また旧図書館に会場を戻し、まず芥川賞作家、川上弘美さんによる日本語講演「古典文学を現代文学の中によりみがえらせる」。小学校時代から古典など苦手だった筆者がいかにしてここに至ったのかの、銜いない明解なお話。日本の自然観照の例として「立ち待ち月」「居待ち月」「寝待ち月」「更け待ち月」に触れ、月齢の歩みと生活時間との親密な対話が喚起される。ふとイスラーム圏で経験したラマダーンの季節の月の出を思い出した。作品へのサイン会には学生たちの長蛇の列ができ、川上さんはひとりひとりと丁寧に言葉を交わしておられた。二日目の合間には新図書館に設けられた茶室・懷庵での接待にご相伴させて頂いた。最終日には俳句の実作演習もあって盛り上がり、評判を呼んだ。夕刻からは、Ueda Susumu 指揮の Requiem Project Choir Japan。東日本大震災の慰霊を事とする企画だが、日本から巡業中の五〇名にのぼる合唱隊の歌声に聴衆も和し、忘れ難いフィナーレとなった。

(国際日本文化研究センター教授)